

子どもが自らを高めていく学習の可能性

—学習材の再考を通して—

大畑 健二 高度教職実践専攻コース

キーワード：教材化，学習材，子どもの主体的な学び，教師の授業観の更新

1. 問題の所在と研究の目的

筆者は子どもが進んで課題に取り組む姿を願い、子どもの興味や関心にもとづいて、実物に触れたり実際の現場へ見学に行ったりする等の体験的な学習活動を積極的に取り入れた授業を行ってきた。新学習指導要領では「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる『主体的な学び』が実現できているか」（文部科学省, 2017, p. 76）という授業改善の視点が示され、子どもの主体的な学びの実現に向けた授業づくりが今後もより一層求められていく。

信州大学教育学部附属長野小学校（以下、附属小）に赴任してからも職場の同僚と互いの授業について振り返る機会が日常にあった。そこでは、「教師は子どものどのような育ちを願って授業を構想したのか」、「教師が提示した学習材は、子どもの主体的な学びにつながっていたのか」など、子どもの学びの姿から教師の授業観、殊に教材化の視点についての検討がなされていった。筆者はこれまでの実践をふり返り、授業における教師の関わりについての課題に気付いていった。それは、教材研究を通して材の価値や魅力を教師自身も感じながらも、子どもが進んで課題に取り組む姿を願い、なるべく教師が誘導するような働きかけは控えようと考えていたこと、授業中、課題に向かえない子どもを見ても「それが今のその子のありのままの姿だから」と積極的に関わっていくことはせずに見守っていたことである。主体的な学びの姿を願いつつも、目の前の子どもの姿をありのままによしとしたり積極的な指導はなるべく控えたりという教師のあり方で、この「主体的な学び」を本当に実現させていくことができるのだろうか。附属小では「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そこからではない。うちからである。児童のうちから構成されるべきものである」（信濃教育出版部, 1998, p. 12）と子どもに即した子ども主体の教育の実現に向け実践に取り組んでいる。附属小を始め、大正期新教育運動の流れの中で大事にされてきたこの教育理念の具現に向け、真に子どもを「内から」育てていくとはどういうことなのか。そして、そのような、子どもが自らを高めていく学習の可能性について、これまでの筆者の授業実践で位置付けられてきた学習材の再考を通して考察していきたい。

2. 研究の方法

本研究では、筆者が授業者として実践したこれまでの事例から、学習材が選定されていく教師の教材化について振り返った。授業学級はF小学校2017年度4年生38名（男子19名、女子19名）、2018年度5年生38名（男子19名、女子19名）。社会科と総合的な学習の時間の実

践から、教師がどのような視点をもって学習材を授業に位置付けていったのか、その教材化の過程について授業実践から考察した。また、いくつかの実践事例を通して本時の学習材を選定する教材化の過程から、教師の視点の移り変わりに着目し、子どもが自らを高めていく学習の可能性について考察した。

3. 授業実践と子どもの学びの姿

3.1 学習材にかかわって

教師によって授業に位置付けられた学習材について、附属小では昭和 23 年度より毎年発行されている学習の手引き書によると「専心活動は、子どもたちが心を寄せ追究しようとしているもの、つまり、学習材によって行われていくのである」(附属小, 1978, p. 6)とされ、子どもが専心して活動に取り組む主体的な学びの姿は教師によって位置付けられた学習材によって実現されていくと説明されている。さらに、学習材と子どもの主体的な学びの姿との関連について「子どもの内に建設する教育とは、子どもが自己を検討し、自己を更新しながら自己を形成していくことである。自らの願いや課題に向かって、対象と深くかかわり、その価値や意味を自分のものとし、自己を高めていく学習である」(附属小, 1984, p. 4)と示されている。このことから、学習材とは、子どもの追究心を高めていくきっかけであり、また、子どもが自らの考えや行為を見つめ、新たな自分を見いだしていく対象との深い関わりを生むものであると言える。まさに、その子の可能性の広がりを願った本時における最大の指導であると捉えることができる。

3.2 実践をふり返って

これまでの筆者の授業実践から、「本時、子どもたちは何を問題として捉え、本学習材に触れたことで何に気付き、その後どのように学習活動を展開しながら、自己を高めようとしていたのか」をふり返り本時の学習材がどう授業へ位置付けられていたのかを考察した。

① 社会科「浄水装置から見つめる、わたしたちの暮らしを支える水(4年)」(2017.5.23)

本時の学習材「犀川の原水(犀川から汲み取ってきた水)」

教師は、「浄水装置を作って自分で水を作りたい」という子どもの願いにもとづき、浄水装置作りの活動を位置付け、上水道についての学習を展開することを考えた。「犀川の原水」を学習材として位置付けた授業場面では、どのような仕組みや工夫によって飲料水が作られているのかを長野市犀川浄水場の見学や働く人の仕事について調べることで理解を深めていくことを学習のねらいとした。しかし、製作活動には没頭しているが、子どもたちの関心は、自らの浄水装置の仕組みや効果などに向き、授業のねらいとは大きくズレていた。

② 社会科「避難生活から見つめる、わたしの命と社会のつながり(4年)」(2017.1.23)

本時の学習材「避難生活訓練(体験活動の場の設え)」

教師は、防災の学習として実際の避難生活を体験することを通して、公的機関によって提供される援助の仕組みと行政と生活の関わりについて学ぶことを構想した。そして、防災倉庫見学での「自分たちで実際に避難生活をしてみたい」という意見をもとに学習活動を展開した。教師は、避難生活訓練の内容を積極的に計画・実行していく姿に子どもの主体的な学びを捉えていた。しかし、一方で、「たったの8時間では本当の辛さは分からないのではないか」というY児らの意見にも触れることとなった。教師が子どもたちと共に学ぼうと構想した学習の方

向性と、活動を促すための学習材の在り方について考えさせられる実践となった。

③ 社会科「北信地域の切り捨て間伐から見つめる森とわたしのつながり (5年)」(2018.9.26)

本時の学習材「林業士の間伐作業によって倒される1本のカラマツ」

教師は、林業の学習を通して、人工林の荒廃における諸問題について自分なりの考えをもって取り組んでいく子どもの姿を願い学習を構想した。「長野市の人工林が本当に荒れているのか森に行ってみよう」というS児らの意見から、何を学ぶために体験活動を行うのかを共有しながら、長野市林務課と一緒に森林整備に取り組んでいく活動を位置付けた。子どもたちは、1本のカラマツが目の前で大きな音を立てながら倒れていく様子と地面に打ちつけられたその振動に驚きを見せ、除伐や間伐作業へ積極的に取り組んだ。そして、林業士が語る森林整備の大変さと未来の森林への期待を聞いたA児は、「動物たちが安心してくらす森を作ってあげたい。林業の仕事に入ってみんなのためにできることを見つけたい」とふり返った。目の前の課題に進んで取り組みながら、林業士の姿と言葉をきっかけに自己のあり方を見つめていくA児の姿から、教師が子どものどのような育ちを願って授業を構想しているのかという学習材選定に関わる教師の教材化の視点を再考する実践となった。

④ 総合的な学習の時間「避難訓練から見つめる わたしたちの命 (5年)」(2018.12.16)

本時の学習材「輪中で暮らす岐阜県海津市西江小学校の避難訓練の様子」

教師は、予期できない想定外の災害に備え、状況に応じた避難行動のあり方について調査・議論しながら、自らの行動を見つめ実生活に目を向けることができる学習を構想した。

これまでの避難訓練を振り返り「状況に応じて自ら判断し行動したい」というK児らの意見をもとに、電話取材等の調査活動を位置付けた。また、教材化の過程では、自ら判断し行動できる訓練にしたいと願う子どもたちが、どのような事実に出会うことでその願いを実現させていく学習となり得ていくのかを考えた。そこで、過去に災害の歴史をもち、現在も災害対策に力を入れている岐阜県海津市の人々の営みを教材化した。学習材に触れたS児は、「5年生の避難訓練の行動の素早さに驚いた。低学年の仲間を支える高学年の姿に、私も、自分の命も附属小の低学年の人の命も守れる高学年になりたい」とふり返った。半年後、予告無しで休み時間に実施された避難訓練で、自分の身の安全を確保し近くにいた低学年に声をかけ一緒に校庭へ避難する子どもたちの姿が見られた。

3.3 教材化の視点から見つめる筆者の学習材の捉え

これらの実践における教師の教材化の視点から、筆者の学習材の捉えをふり返ってみる。事例①では、教師は、積極的に活動に取り組んでいく子どもの姿を願い、子どもが「やりたい」、「おもしろそう」等、教材化の視点は活動への意欲を高めるための学習材に向けられていた。結果、積極的に活動へ取り組む姿は見られたが、教師が構想していた授業のねらいに迫ることはできなかった。続く事例②での教材化の視点は、いかに子どもが活動を計画し、自ら活動を決めだしていく場を授業で作ることができないかということに向けられていた。結果「避難生活のような体験はできたが本当のことは分からない」というY児の振り返りから、教師が子どもと共に学んでいきたい材の価値を見極めた上での体験的な学習活動の位置付けが課題となった。事例③では、子どもの願いにもとづきながら、教師自身が教材化の過程で捉えた材の価値と体験的な学習活動との関連を検討し、学習材を決め出していった。結果、自分の思いや将来への願いと重ねながら森林との関わりについての考えをもつA児の姿が見られた。事例④で

は、自己を見つめ、自らのあり方をよりよいものへと高めていこうと願う子どもたちに、教師はどう応え得ることができるのかを考えて教材研究に取り組んだ。そして、自ら判断して行動したいと願うS児は、児童を中心とした防災教育を実践している岐阜県N小学校の取組とそこでの子どもの思い（学習材）に触れ、避難訓練の目的や価値を捉え直し、高学年としての役割や自己への期待を高めていった。また、教師はこの後の避難訓練でこれまでには見られなかった子どもの姿に思い知らされていく。避難指示が放送で流れた直後、子どもたちは必死になってその場の状況を把握し、近くにいた低学年に指示をしながら一緒に避難をしていた。

このような教材研究の過程で授業に位置付けられた学習材によって、子どもの姿の発見や材の価値の捉え直しなど、子どもの学びと共に教師自らにも学びが起きていることを実感した。

4. 考察

以上の実践から筆者の学習材の捉えが、願いや課題に対し単なる活動への意欲を高めるための指導という視点から、子ども自らが学習の目的やその意味、自分の思いや行為を見つめる、まさに自己の生き方に迫るための指導へと更新された。つまり、学習材とは、その子の今を足場に、よりよく生きていこうとする学びを高めるための教師の指導となり得るものであると言える。また、1時間1時間の授業を通して子どもが自らを高めていく学習を実現させていくには、授業を構想し学習材を選定していく教師のあり方の問題を問わずにはいられない。子どもの育ちをいかに願い、対象との関わりから生まれる子どもの願いにもとづきながら、材の価値を見極め、そうして選定された学習材を軸に子どもと共に学んでいこうとする教師の姿勢が重要であると考えられる。その子の可能性をどこまでも広げていく学習材を選定していく過程に、教師の授業観そのものが表れていくのだと考える。このような学習材との出会いのある授業を通して、子どもが自らを高めていく学習は実現されていくのではないだろうか。子どもを真に「内から」育てていこうとする学習には、学習材を軸に子どもと共に対象の意味や価値を求め、いこうとする教師の積極的な指導が欠かせないのである。

5. おわりに

本研究では、これまでの筆者の授業実践をもとに学習材の再考を通して、子どもが自らを高めていく学習の可能性について言及してきた。また、教師のあり方を問題としていくとき、その果てしなさも痛感している。学習材を決め出していく教材化の過程で、子どもの育ちをいかに願い、子どもと共に学ぶ探求者としてその学習の価値や方向性を見定めていく教師のあり方が今後も課題として残されている。子どもの主体的な学習の実現に向け、子どもと共に内から育っていく教師のあり方について、これからも授業実践を重ねていきたいと思う。

文 献

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編，（2017）
- 2) 信濃教育会出版部：信州総合学習の源流－淀川茂重『途上』から生活科・総合的な学習へ－，（1998）
- 3) 信州大学教育学部附属長野小学校：子どもと学習－学習の手引き－，（1978）
- 4) 信州大学教育学部附属長野小学校：子どもと学習－学習の手引き－，（1984）